



Jumpa lagi kg. Lenggong!

～また会おうね！レンゴン村～



鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会

青年海外協力隊鹿児島県 OB 会

公益財団法人 鹿児島県国際交流協会

は じ め に



鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

会長 弓 場 秋 信

(鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長)

鹿児島県青少年国際協力体験事業は、開発途上国で「国づくり、人づくりに貢献する」青年海外協力隊員の活動現場に鹿児島の青少年を派遣し、国際協力に対する理解を深めると共に、ホームステイ等での異文化体験、学校等での現地学生との交流を通して、国際性豊かな青少年を育成することを目的に実施しています。本事業は、鹿児島県青年海外協力隊を支援する会、青年海外協力隊鹿児島県 OB 会、公益財団法人鹿児島県国際交流協会で構成された実行委員会で開催しており、平成3年にマレーシアに派遣して以来、30回にわたってインドネシア、タイ、ベトナム、ラオス、カンボジア、スリランカの7ヶ国に県下一円から今回の15名を含む376名の中高生を派遣してきました。

今年度は感染症拡大の影響を受け、4年ぶりの実施となりました。派遣国は、予算、本県出身者の協力隊員の有無、治安状況、ホームステイ先の確保等から候補国を検討し、30回目の節目の派遣として、第1回目に訪れたマレーシアを派遣国として決定しました。本事業の共催市である鹿児島市、鹿屋市、霧島市、枕崎市、南九州市、南さつま市、いちき串木野市からの推薦の12名と、企業の協賛を得ての実行委員会枠3名の計15名の団員は、2回の事前研修を経て、7月23日～30日までの日程で、JICA マレーシア事務所、青年海外協力隊員2名の活動先視察、ペラ州レンゴン地区でのホームステイ、現地学生との交流を行いました。

ここに団員の日々の体験・見たこと・感じたことが綴られた報告書「Jumpa lagi kampung Lenggong」を作成いたしましたので、多くの皆様にご覧いただければ甚大に存じます。

終わりに、本事業実施に当たりご支援ご協力を頂きました、共催市、協賛企業、国際協力機構 JICA 九州センター、JICA マレーシア事務所、心温まるもてなしでホームステイを受け入れて頂いたペラ州レンゴン地区の皆様、そして活動中の JICA 海外協力隊員をはじめとする多くの関係者に、心より感謝申し上げますとともに、今後とも本事業へのご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

も く じ

はじめに

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会 会長 弓場 秋信

ごあいさつ 1

鹿児島県観光・文化スポーツ部 部長 悦田 克己

第 30 回（2023 年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要 2

参加団員等名簿 3

スケジュール 4

地図 5

体験事業ドキュメント（総集編） 6

～事前研修から帰国報告会までの様子を団員の日記と併せて紹介します～

団員が感じたこと 16

「おもてなしの国、マレーシア」	大 迫 佳 乃
「笑ってみなきゃわからない！」	城 山 千 晴
「学びと 出会いと 感動と」	坂之上 琉 生
「マレーシアで学んだこと」	久保田 紗 那
「大好きなマレーシア」	朝 田 真 央
「挑戦・新鮮・マレーシア」	桑 原 さくら
「マレーシアが私にくれたもの」	園 田 春 陽
「またいつか会える日を願って」	村 上 由 佳
「マレーシアでの学び」	前 野 優 夏
「マレーシアのおかげで」	大 渡 彩也華
「幸せの在り方」	森 田 遥 香
「私にできる第一歩」	加世田 美 雪
「本当の楽しみ方とは」	奥 田 優 希
「新しい価値観や視野」	井 上 心 結
「Seeing is believing」	徳 永 理 咲

団長報告 31

「マレーシアでの学びが「Build Your Dreams」」

弓場 秋信（鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会会長）

同行者感想 32

「マレーシアでのホームスティ」	藤 井 一 彦
「JUMPALAGI ～またいつかどこかで～」	北 田 尚 子
「マレーシアを通して感じたこと」	五反田 えりな
「ジュンパラギ、マレーシア」	中 野 あずさ
「異文化に飛び込んだ夏の 1 週間」	田 上 晶

新聞記事（南日本新聞、奄美新聞、南海日日新聞） 37

参考資料 41

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績

ご あ い さ つ



鹿児島県観光・文化スポーツ部長

悦 田 克 己

「第30回（令和5年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業」の御成功を心からお喜び申し上げます。これも、事業実施に御尽力された弓場秋信実行委員会会長をはじめ、関係者の御支援・御苦勞の賜であり、心から敬意を表します。

また、皆様方にはかねてから本県の国際交流・国際協力の取組をはじめ、本事業に代表される青少年の海外体験の促進などに格別の御協力をいただいていることに対して、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

今回の体験事業では、参加者15名が、7月23日から7月30日まで7泊8日間の日程で、マレーシアを訪問し、現地で青少年活動、障害児・者支援活動を行っている青年海外協力隊員2人の活動現場を視察されたほか、現地家庭でのホームステイ等を体験してこられました。

今回の訪問国であるマレーシアは、1982年に当時のマハティール首相が提唱した「東方政策」や、頻繁な要人往来、直接投資や貿易・技術協力などを通じた緊密な経済関係、活発な文化・留学生交流に支えられ、日本とは良好な関係が続いております。

団員の皆さんは、帰国後、8月1日に県庁を訪問し、塩田康一知事及び地頭所恵教育長に報告をされました。皆さんからは、マレーシアの人々の心の温かさや、異文化交流の楽しさ、歴史・生活習慣・文化の違いによる戸惑い、青年海外協力隊の活動を現地で視察した感想など、それぞれの体験から様々なお話があったと伺っております。

今回の訪問で、団員の皆さんが自分の目で見て、感じ、考えてきたことは、実際に現地へ足を運ばなければ体験することのできない、たいへん貴重なものだと思います。それらを心に深く刻み、実行委員会の方や御家族、渡航先でお世話になった方など今回の訪問を支えてくださった全ての方々への感謝の気持ちを忘れず、今後も国際交流・国際協力や国際社会等についての学習を深められ、それらの担い手として、将来、御活躍いただくことを希望しております。

近年、県内の在留外国人の方々も急増していることなどから、県民の皆様方が国際理解を深め、多文化共生を進めていくことがますます重要になってきています。県では、今後とも、これに対応する必要な取組を積極的に進めてまいりたいと考えておりますので、皆様の一層の御協力をお願いいたします。最後に、「鹿児島県青少年国際協力体験事業」のますますの御発展と、関係の方々及び団員とその御家族の皆様方の御健勝・御活躍を祈念いたします。

第30回（令和5年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業の概要

- | | | |
|------------------|--|---|
| 1 主 催 | 鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会
※ 構成団体 鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
青年海外協力隊鹿児島県OB会
公益財団法人鹿児島県国際交流協会 | |
| 2 共 催 | 鹿児島市，鹿屋市国際交流協会，枕崎市教育委員会，
霧島市国際交流協会，南さつま市友好交流推進協議会，
南九州市教育委員会，いちき串木野市国際交流協会 | |
| 3 後 援 | 鹿児島県
鹿児島県教育委員会
独立行政法人国際協力機構九州国際センター | |
| 4 協 力 | 在日本マレーシア大使館
マレーシア教育省ペラ州教育局 | |
| 5 協 賛 | 鹿児島北ロータリークラブ
鹿児島空港ビルディング(株)
鹿児島ヨコハマタイヤ(株)
小正醸造(株)
(株)下堂園
大福コンサルタント(株)
日本システム(株)
(株)山形屋
(株)レイメイ藤井 | (株)鹿児島銀行
鹿児島トヨタ自動車(株)
キンコー醤油(株)
薩摩酒造(株)
城山観光(株)
南国殖産(株)
(株)M i s u m i
弓場貿易(株) |
| 6 事業の流れ | 4月～5月
6月17日(土)
7月2日(日)
7月23日(日)
7月30日(日)
8月1日(火)～24日(木)
8月19日(土)
9月～10月 | 募集・団員決定
第1回事前研修
第2回事前研修
出発
帰国
表敬訪問
報告会
報告書作成 |
| 7 派 遣 国 | マレーシア | |
| 8 派 遣 期 間 | 7月23日(日)～7月30日(日) | |
| 9 派 遣 人 員 | (1) 参加者 15名
(2) 引率者 6名 | |

参加者団員等名簿

■ 団 員

	名 前	性別	学 校	学年	市 町
1	おお さこ か の 大 迫 佳 乃	女	鹿児島市立甲東中学校	3	鹿児島市
2	き やま ち はる 城 山 千 晴	女	鹿児島県立鶴丸高等学校	1	鹿児島市
3	さか の うえ りゅう せい 坂之上 琉 生	男	樟南高等学校	3	鹿児島市
4	く ぼ た さ な 久保田 紗 那	女	鹿児島県立鹿屋高等学校	1	鹿屋市
5	あさ だ ま お 朝 田 真 央	女	鹿児島県立鹿屋高等学校	2	鹿屋市
6	くわ はら さくら 桑 原 さくら	女	枕崎市立立神中学校	3	枕崎市
7	その だ はる ひ 園 田 春 陽	女	鳳凰高等学校	1	枕崎市
8	むら かみ ゆう か 村 上 由 佳	女	霧島市立陵南中学校	1	霧島市
9	まえ の ゆう か 前 野 優 夏	女	鹿児島県立吹上高等学校	2	南さつま市
10	おお わたり さ や か 大 渡 彩也華	女	鹿児島県立加世田高等学校	1	南九州市
11	もり た はる か 森 田 遥 香	女	鹿児島県立鹿児島中央高等学校	2	いちき串木野市
12	か せ だ み ゆき 加世田 美 雪	女	鹿児島県立市来農芸高等学校	2	いちき串木野市
13	おく だ まさ き 奥 田 優 希	男	瀬戸内町立古仁屋中学校	3	瀬戸内町
14	いの うえ み ゆ 井 上 心 結	女	樟南高等学校	3	薩摩川内市
15	とく なが り さ 徳 永 理 咲	女	鹿児島育英館高等学校	1	日置市

■ 同行者

		名 前	性別	備 考
1	団 長	ゆみ ば あき のぶ 弓 場 秋 信	男	鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長
2	調 整	ふじ い かず ひこ 藤 井 一 彦	男	(公財) 鹿児島県国際交流協会 総務企画課長
3	調 整	きた だ なお こ 北 田 尚 子	女	青年海外協力隊マレーシア OV (養護)
4	調 整	ごたん だ えりな 五反田 えりな	女	青年海外協力隊スーダン OV (看護師)
5	マスコミ	なか の 中 野 あずさ	女	南日本新聞社編集局報道部 記者
6	マスコミ	たの うえ あきら 田 上 晶	男	鹿児島放送報道情報センターニュース部 記者

スケジュール

月 日	曜	地 名	時 刻	交通機関	内 容	宿 泊
7月23日	日	鹿児島中央駅 鹿児島中央駅発 博多駅到着 福岡空港着 福岡空港発 バンコク着 バンコク発 クアラルンプール着 空港発 ホテル着	5:10 6:08 7:44 8:30 11:35 14:55 16:40 19:50 20:30 21:30	新幹線 ジャンボタクシー TG649 TG417 専用車	集合・結団式 福岡空港へ移動 チェックイン ホテルへ移動 コーラスホテル予定	ホテル
7月24日	月	ホームステイ先		バス	午前：JICA 現地事務所訪問 午後：ホームステイ先へ移動 ペラ州レンゴン地区	ホームステイ
7月25日	火	ホームステイ先		バス	午前：青年海外協力隊活動視察 【障害児・者支援 田ノ畑 祥一 隊員】 午後：現地中学生との交流 学校名：Sekolah Menengah Kebangsaan Sultan Azlan Shah	ホームステイ
7月26日	水	ホームステイ先		バス	午後：青年海外協力隊活動視察 【青少年活動 谷口 亮 隊員】 夕方：ホストファミリーと過ごす	ホームステイ
7月27日	木	シエムリアップ タトラヴ村（シエムリアップ）			終日：ホストファミリーと過ごす お別れ会	ホームステイ
7月28日	金	ホテル		バス	午前：村とお別れ 午後：クアラルンプール視察	ホテル
7月29日	土	ホテル発 クアラルンプール発 バンコク着	17:00 20:55 22:05	バス 専用車 TG418	クアラルンプール視察 レイトチェックアウト	機内泊
7月30日	日	バンコク発 福岡空港着 空港発 かごしま県民交流センター着 かごしま県民交流センター	0:50 8:00 9:00 13:30 14:00	KE785	解団式	

地 图



体験事業ドキュメント (総集編)

6月17日(土)～7月2日(日)
第1回・第2回事前研修



マレーシアの基礎知識やマレー語の勉強をしました。最初は自己紹介だけでも覚えるのに苦労しましたが、今では大好きな言語になりました。
前野優夏



マレー語ってどんなのなんだろうと疑問ばかりでした。習っていくうちに、「スラムツ」がつく言葉がとても多いことに驚きました!

桑原さくら



7月23日(日)
結団式・出発



早期の結団式。

「帰国した時の私たちの姿を楽しみにしてください。」と決意表明をしました。

7月24日(月)
午前：JICA マレーシア事務所 訪問



JICA 事務所を訪問。
ビルの29階にあり、びっくりしました。
徳永理咲



7月24日(月)
午後：入村式・ホストファミリーとの対面



ホストファミリーとの対面式ではとても緊張しましたが、素敵な笑顔で受け入れてくれました。

村上由佳



7月25日(火)

午前：青年海外協力隊活動現場視察（田ノ畑祥一隊員 障害児・者支援）

施設名：Sekolah Kebangsaan Datin Khadijah



ここでも盛大な歓迎会がありました。また、鹿児島出身の JICA 隊員である田ノ畑さんから、「行動する」大切さを学びました。



午後：現地中学校との交流

施設名：Sekolah Menengah Kebangsaan Sultan Azlan Shah



お互いの文化交流を通して、異文化理解に繋がれたと思います。

大迫佳乃



熱烈な歓迎と、好奇心に満ちたキラキラした目に、熱いエネルギーを感じました。

城山千晴

7月26日(水)

午前：青年海外協力隊活動現場視察（谷口亮隊員 青少年活動）

施設名：Pertubuhan Pemulihan Dalam Komuniti Merbok



谷口隊員の「言葉が通じなくても、困ったときには、あなたを助けてくれる人がきつという」言葉がとても印象に残りました。

朝田真央



夕方：ホストファミリーと過ごす時間



ホームステイ先の男の子がとても元気でパワーをたくさんもらいました。

奥田優希



家族みんなでリビングに集まって、日本とマレーシアのお土産をひろげながら、たくさん話しました。日本の大晦日のようでした。

園田春陽

7月27日(木)

終日：ホストファミリーと過ごす1日



1日目は緊張しましたが、この日はたくさん
会話ができました。私を受入れてくれたホスト
ファミリーに感謝の気持ちでいっぱいです。

大渡彩也華

一番古いモスクを見に行ったり、みんなでご飯を食
べに行ったりと、色んなことをして過ごしました。たく
さんお話し、絆が深まる時間となりました。ほんとに
いい一日でした。

久保田紗那



はじめは、あまり会
話ができなかったが、伝統衣装を着さ
せてもらってから、一
気に心の距離が縮ま
り、コミュニケーション
が。取れるようになり
ました。

坂之上琉生

7月27日(木)
夜：村とのお別れ会



それぞれ料理を取って楽しみました。最後には村中の人が集まり、とても賑やかなお別れ会になりました。

加世田美雪

7月28日(金)
午前：村とのお別れ



離れたくなかったですが、再会を約束してお別れしました。ホストファミリーと過ごした時間は私の宝物です。

森田遙香



バスが見えなくなるまで手を振ってくれました。会えなくなる寂しさで涙があふれてきました。

井上心結



7月28日(金)～29日(土)
クアラルンプール視察



ツインタワーなど、高いビルがたくさんあり、東京よりも都会なのではないかと感じるほどでした。

園田春陽



ピンク色の「プトラモスク」は、とても美しかったです。一度に1万5000人がお祈りをする事ができるほど、とても大きなモスクでした。皆さんもぜひ訪れてみてください。

森田遙香



7月29日(土)
午後：マレーシア 出国



出発する実感が湧きませんでした。マレーシアの人の温かさに触れて、空港では逆ホームシックになってしまいました。

城山千晴

7月30日(日)
帰国・解団式



事業に携わって頂いたすべての方に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。これからの人生へと繋げていきたいと思います。

徳永理咲



8月1日(火)～8月24日
表敬訪問



8月19日(土)
報告会



この研修を無事に楽しく
終わることができたのは、
優しくてノリがいい、最高の
団員メンバーに巡り合えた
からだと思います。

本当にありがとうございました！

坂之上琉生



団員が感じたこと

おもてなしの国、マレーシア

鹿児島市立甲東中学校3年

大迫 佳乃

お風呂は水のみ、トイレも旧式、食事は手で…。事前研修でこの言葉を何度も耳にし、不安と緊張の中、派遣当日を迎えました。そしてすごした8日間。マレーシア派遣事業を終えて帰国した今、私は本当の豊かさについて考え続けています。

ホームステイ初日、布団の中で「やっぱり帰りたい」そう思いました。少し覚悟はしていたものの、言葉は見事に通じないし、料理は見たことのないものばかり、シャワーヘッドから出てくるのは冷たい水、水、水、笑いたくてもうまく笑顔が作れず、夜もうまく眠れませんでした。でも翌朝からホストファザーとマザーが、私の不安を打ち消そうと、あれこれ気づかせてくださるのが伝わってきました。特に、ホストマザーはとてもパワフルな方で、私が理解しやすいように体いっぱいのジェスチャーを交えながら英語で話しかけてくれました。そのおかげで、不安がいつしか楽しみに変わっていききました。

最終日の夜、ホストマザーから手渡されたのは、お菓子でデコレーションされた手作りの花束と民族衣装でした。どちらも私の好きな紫色…。あ、昼間ホストマザーが”What’s your favorite color?”と聞いてくれたのは、このことだったんだ！カードには「マレーシアのお父さんお母さんより」と日本語で書いてありました。それを見たとき、言葉にならない思いが、私の胸に広がりました。

ホームステイのあいだ、私は自分自身の考えが変化していくのに気づきました。マレーシアのどこへ行っても、現地の方たちは歓迎の気持ちを愛情いっぱいに、まっすぐに伝えてくれました。また学校訪問では、私たちの到着が大幅に遅れたにもかかわらず、みなさん笑顔で出迎えてくださり、交流活動を通じてあっという間に打ち解けることができました。普段、自分の意見を後回しにしがちな私は、人懐こい子どもたちの笑顔にふれて、自分の喜怒哀楽や感情はもっともっと相手に伝えていいのだということを学びました。学校訪問で見せてくれた子どもたちの笑顔と温かい手のぬくもりは今も忘れられません。

今回の派遣で私たちが訪れた村は、設備や交通とい

った点では鹿児島よりも不便かもしれませんが、そこで暮らしている方々の笑顔は本当に輝いていて、私が思い描いていた「幸せ」の基準がぐらつき始めています。シャワーをひねれば熱いお湯が出ることやいつでも安心して水が飲めること、確かに村の発展には大切なことかもしれません。ですが、それ以上に心の持ち方が大切なのだとすることに気づかせてもらいました。この研修で学んだことを家族や周りの友達、先生方などにも伝えていこうと思います。

マレーシアは、急速に発展する国の一つとして世界中から注目されているそうです。今回の研修を機会に、マレーシアについてさらに知識を深め、応援し続けていきたいと思っています。そして、いつかマレーシアのお父さんお母さんに会いに行こうと思います。最後に、この研修に参加させてくださった多くの方々に感謝申し上げます。テリマカシ！



ホストファミリーと初対面の様子（真ん中本人）



3家族で夜ご飯を食べに行った時の様子

団員が感じたこと

笑ってみなきゃわからない！

鹿児島県立鶴丸高等学校1年

城山 千晴

出発前日、胸の鼓動が止まらなかった。どんなときも、"なんとかかなるでしょ"の私でも、この時ばかりは顔が固まっていた。大都会クアラルンプールを出て、レンゴンの深い山へ。緑が深くなるにつれて、私の不安が増していく。しかし。入村式で私たちを待っていたのは、マレーシアの方々の笑顔だった。にんまりとした優しい眼差し。心がじんわりとあたたかくなるのを感じる。

私のホストファミリーはキャンプ場を経営していた。私がホストシスターだと思っていた、唯一英語が通じたお姉さんのフスナは、実は大学生でキャンプ場ヘイターンシップ中の私と同じホームステイ中の身であり、最終日前日その真実を知った時は腰を抜かした。それくらい、まるでスタッフ全体、いやお客もくめて1つの家族のようだった。みんな本当に優しくった。笑顔を見るだけで、心の豊かさが伝わった。私の不安を吹き飛ばしてくれた彼らのように、私も誰かに笑いかけられたらと思う。

マレーシアにいと、日本国内の課題についても見えてくる。大きいのは、国際文化への理解だと思う。1つの経験として、私がお土産として持って行った日本のお菓子が、ハラルマークが無いためにあまり受け入れてもらえなかったことがある。日本に実習などで来日するマレーシアを始めとした国々のイスラム教徒の数は年々増えている。そうした方々の文化の理解と、ともに暮らしていくための配慮が求められると思う。私も交流を深めて、困っている海外からの移住者の方々の助けにしていきたい。

また、私が特に印象に残ったのが、現地の中学校への訪問だ。日本だと考えられないほど熱い歓迎を受け、とても嬉しかった。言葉が通じなくても、教えてくれた伝統遊びはとても盛り上がった。石を投げて手の甲にさせる遊びなのだが、かなり難しく、苦戦しつつ成功したときは手を叩きあって喜んだ。現地の友達もたくさん増えた。またみんなの目はキラキラしていて、校歌の合唱の時はそのものすごい迫力に驚いた。建設中の高層ビルが立ち並び、これからどんどん発展していくマレーシアを支えていく彼らのパワフルさを肌で

感じた。

マレーシアの日々は一瞬にして過ぎ去り、ホストファミリーとの別れは辛すぎて涙が止まらなかった。今回学んだことは、多すぎてここでは伝えきれないが、1番大きいのは、"笑ってみなきゃわからない"ということだ。日本にいても、ニュースや本で海外を知ることが出来るが、そこからの少ない情報を頼りにイメージだけが先行して膨らんでしまうことが多いと思う。でも実際人と（言葉は通じなくても）笑い合うことで、自分が持っていた先入観の間違いを知ることが出来る。デジタル化が進んだ今だからこそ、もっと世界に飛び出して、そういった偏見を無くしていきたいと思う。そしてホストファミリーと、ここまで支えてきてくれた家族、学校、協賛企業様、鹿児島市、事務局の方々に感謝を伝えたい。terima kasih!!!



中学校の広場の写真。建物がとってもカラフルで可愛い。



ホストファミリー、ホストファザーの友達と、レストランでマレーシア料理、とても美味しかった！
（本人あり：左前）

団員が感じたこと

学びと 出会いと 感動と

樟南高等学校3年

坂之上 琉生

福岡空港から約8時間のフライトを経て着いたクアラルンプール。ホテルまでのバスの車窓から見たあの夜景は一生忘れない。街を埋め尽くす高層ビル、見たことない輝きを放つツインタワー。東京よりも発展しているなと感じた。ホテルについて明日からの日程に期待で胸を膨らませながら眠りについた。

次の日、JICAの事務所にて、JICAの活動内容やホームステイ先での注意点について教えて頂いた。期待で胸を膨らませていた私だったが、注意点を聞くにつれて不安が増していった。

JICAを後にし、中華を食べ、ホストファミリーの待つ、ペラ州レンゴン地区へ向かった。到着してバスを降りると、私たちのホストファミリーたちが盛大に迎え入れてくれ、入村式と歓迎会を催して頂いた。そこで初めて自分のホストファミリーと顔合わせをした。

入村式を終え、自分のホストファミリーの家に向かった。私のホストファミリーは5人家族でホストペアレント以外は英語も通じる家庭だった。荷物を置いて自己紹介とお土産を渡した。お土産をすごく喜んでもらえてすごくうれしかった。

私の家のお風呂は水シャワーだった。初日は冷たすぎてまともに体も洗えなかった。トイレも少し床が濡れていて、入るのに少し抵抗を感じた。生活になれなかったホームステイ初日だった。

3日目からは、現地の小学校、中学校を訪れ、交流を深めた。私たちは書道、折り紙、歌の発表をした。特にドラえものの歌を現地の人も一緒に歌ったのが印象的だった。また、協力隊の田ノ畑隊員や谷口隊員から、マレーシアの課題やお二人の活動内容を実際に見たり、聞いたりすることで自分も国際的に活躍できる人材になりたいと改めて強く感じた。ホストファミリーとの生活にも慣れ始め、夜市場や屋台に行ったり、他の団員とその家族を集めてダーツパーティーをした。

ホームステイ最終日には、動物園に行ったり、川で水浴びをしたりした。お別れパーティーもとても盛り上がり充実した4日間だった。初日からすると4日で見違えるほど環境に適應できるようになった。

村を離れるとき、ホストマザーの涙にもらい泣きし

そうになった。ホストファミリー、レンゴンの皆さん本当にありがとう。そして、Jumpa lagi!!! (また会いましょう!!!)

6、7日目のクアラルンプール視察では、クアラルンプールの発展の勢いと活気に驚くとともに、街並みに民族や宗教の違いを感じた。また川の汚染、ゴミが道端に落ちていたり、衛生環境が発展に追いついていないと感じた。

帰りの飛行機の窓から次第に離れていくクアラルンプールを見て寂しい気持ちにもなったが、楽しかった思い出の余韻に浸りながら8時間のフライトを終えて、無事に帰国した。

この事業で私は、異文化理解や国際協力について学ぶとともに、マレーシアの人々の温かさを感じた。この事業で体験してきたことのすべてが私の貴重な財産になった。

この事業にかかわってくれた方々全員に感謝し、学んだことをまずは近くの人から広め、自分の今後の将来に繋げていきたい。

Terima kasih!!!! (ありがとう!!!!)



ダーツパーティーの様子



ペラ州の動物園 (本人前列左から2番目)

団員が感じたこと

マレーシアで学んだこと

鹿児島県立鹿屋高等学校1年

久保田 紗那

今回のマレーシアでの体験で自分自身を見つめなおすことができたり、世界について深く考えたりすることができました。特に印象に残ったことは、マレーシア人のおもてなしです。日本では決して体験することができない感動がありました。まず入村式では村の人全員でお出迎えをしてくださり、涙が出るほどの嬉しさでした。今まで緊張や不安を持っていた自分でしたが、ホームステイが一気に楽しみになりました。また、青年海外協力隊員の田ノ畑隊員が働いている小学校では生徒が私たちのためにご飯を用意してくださったり、踊りを見せてくれたり、先生方と一緒に写真を撮ったり、別れるときには涙が止まりませんでした。ほんとに歓迎してくれて嬉しかったです。また、今回マレーシアのレンゴン地区だったからこそその絆を感じることができました。夜になると、近所の家族と夜ごはんを食べたり、パーティーをしたり、王様の宮殿を見に行ったり、お買い物に行ったり、村の人たちが仲が良かったからできたことがたくさんありました。またホストファミリーは私のことを本当の娘として家族として約3日間過ごしてくれました。少ない期間でしたが心から愛してくれました。本当に心から感謝しています。マレーシア人は村の人全員でおもてなしをしてくれたけど、きっと日本だったら近くの家の方々と一緒に出迎えではなく、それぞれの家庭でおもてなしをすると思います。おもてなしの仕方でも国の文化が違うのだなと思いました。

マレーシアは発展途上国と聞いていたので、勝手に貧しくて生活が大変だと思っていたのですが、全くそれを感じることがありませんでした。むしろ、都市は東京ぐらい発展していたのではないのかなと思うくらいビルも高くて夜になると屋台がにぎわっていてとても明るかったです。でも、都市部と地方部ではやはり格差があるなと思いました。それは日本も同じ問題を抱えていると感じました。これからも世界と協力して発展してってほしいです。また、マレーシアは多文化社会でイスラム教など宗教については日本で考える機会が少ないのでいい機会になりました。

今回のマレーシア研修では、日本文化とは全く異なる

部分も多かったです。言葉も通じるかほんとにギリギリまで不安でした。でも、ホストファミリーが私が話している時に真剣にきいて理解しようとしてくれるのがほんとに嬉しかったです。

「言葉の壁」は全然分厚くないなと思いました。でも、今回の研修で自分の英語力が試せてまだまだだなと思いました。もっと勉強しないとと思った反面、自分に少し自信ができました！

ほんとに貴重な経験をさせていただきました。私は将来国際関係の仕事につきたいと考えています。将来について深く考えさせられる体験が多かったです。この経験が無駄にせず、これからの自分に生かしていきたいです。

今回はほんとうにありがとうございました。



三家族とお買い物



(本人あり：左前) マレーシアの中高生と撮った写真

団員が感じたこと

大好きなマレーシア

鹿児島県立鹿屋高等学校2年

朝田 真央

マレーシアの首都、クアラルンプールに着いて私はまず驚きました。クアラルンプールは東京よりも都会ではないかと思ってしまうくらい高い建物がたくさんあり、発展していました。しかし国全体をみるとどうでしょうか。公共の排水口に普通にゴミが落ちているような衛生環境が悪い貧困地域もあるそうです。私は様々な隊員のお話を聞いて都市と農村部で大きな格差があるという事をととても感じました。そして、実際に海外に行き頑張っている方達の「自分が今いる場所や立場で自分にできる精一杯のことをする」「たくさん人を頼ってたくさん助けてもらいなさい」という言葉がとても心に響きました。一生懸命な隊員の姿は、私の目にとてもキラキラ輝いて映りました。

私がこのスタディツアーで1番楽しくて心に残っていることはホームステイです。私たちのホストファミリーはみんなイスラム教徒でした。私はマレーシアに来るまでイスラム教のことをよく知らずに、「怖そう、厳しそう」と勝手に偏見を持っていました。しかしその考えは大間違いでした。実際にホストファミリーに会ってみると心優しく、とても暖かい家族で居心地が良かったです。

私は、マレー語が完璧ではない状態でマレーシアに行きました。最初にホストファミリーに会った時は何を言っているのかが本当にわからなくてどうしよう、と思っていました。どうにか交流をしようと、日本から準備してきた折紙を作り、アルバムを見せて、日本語で家族の名前を書いたりしました。すると急に距離が縮まってもっと仲良くなれました。家族みんなでニコニコしながら過ごしたあの時間は最高に幸せでした。会話をしたいときは指差し会話帳で話したりジェスチャーを繰り返したりしてなんとか伝えました。お互いに理解したいという気持ちが強かったので、一緒に過ごす時間が長くなるにつれて話したいことが雰囲気でもわかるようになってきました。私がアルバムを見せると、ホストマザーもアルバムを見せてくれました。たくさんあったホストファミリーのアルバムは、どれも家族愛で溢れていました。本当に最高の家族です。

この事業に参加して、自分がよく知らないにも関わ

らず思い込みで勝手に偏見を持つべきではないということがよくわかりました。そして日本に今まで住み続けていた私は、視野が狭く世界には様々な知らない事がたくさんあるということも感じました。今回の体験をして私は世界で活躍できる人になりたいと思えるようになりました。これからたくさんの国に行き、自分の目で見て学び、柔軟な考えを持てるようになりたいです。そして私はまた必ず大好きなマレーシアのホストファミリーのところに帰りたいのでその時までにもっとマレー語を勉強しておきます！

本当にたくさんの方々のおかげで私は一生心に残る最高の経験ができました。感謝でいっぱいです。テリマカシーバニャバニャツ（たくさんたくさんありがとう）。この事業に参加できてとても良かったです。



（本人あり：左）ホストブラザーの家族と一緒に



（本人あり：左）現地の中学生とかぶと作り

団員が感じたこと

挑戦・新鮮・マレーシア

枕崎市立立神中学校3年

桑原 さくら

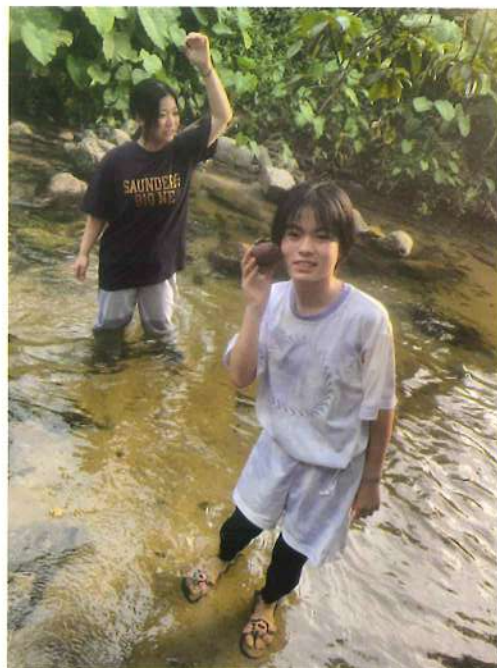
私は、この事業に参加して日本では体験できない経験をたくさんすることができました。数えきれないほどたくさんの経験をしましたが、その中でも新鮮だった経験がいくつかあります。

一つ目は、自然がとても身近に感じられたことです。3分ほど歩けば川があり、庭先にはバナナの木があり、家の前にあるヤシの木の森には朝や夕方になると猿が現れたりしました。また、家には鶏がいたり、果物の木がたくさん生えていたりしました。現地の子供達は、学校から帰ってくると川で遊んだり、果物をとって食べたりしていました。私も川で水遊びをしました。川の水は透き通っていてとても冷たかったです。マレーシアではこの水遊びやシャワーを浴びることを「マンディー」といい、現地では、1日に何度もこの「マンディー」をします。暑いマレーシアで過ごす人々の生活の知恵だと感じました。すぐそこにきれいな川があり、思った時に水遊びができる環境はとてもうらやましく、自然と共に生きている姿に感動しました。また、マレーシアの方々が1日何回も行うことの一つに「食べる」があります。マレーシアでは1日に5食ほど食べるのが当たり前だそうです。朝・昼・夜はもちろんですが、朝食と昼食の間に一回軽食があり、昼食と夕食の間にも軽食があります。その影響もあるのかマレーシアの学校にはチャイティーンという飲み物や軽食を販売している場所があるそうです。また、道路の脇にはちょっとした屋台やジュースや果物が売っている店がたくさんありました。研修中もホストファミリー宅に帰ってくると夕食の前に少しフルーツや日本という餅のようなものを出してくれたりしました。

二つ目は、マレーシアの方々のフレンドリーさについてです。ホームステイ中はホストファミリーとだけではなく、近所の子供達やホストファミリーの友達との交流もありました。どの方も「名前は何?」「好きなものは何?」と興味津々にきてくれました。また、近所の子供達は、私が研修からホストファミリー宅に帰ってくるとすぐ遊びにきてくれて、ほとんど毎日一緒にお菓子を食べたり、遊んだりして貴重な時間を過ごすことができました。また、私は入村式の時や研修

で訪れた小学校の歓迎ムードに感動しました。日本では感じられない、フーフーワーという感じの盛り上がり方でその場所にいるだけで幸せな気分になりました。日本では昔より人間関係が希薄になっていると言われますが、マレーシアは人と人のつながりが強くそれぞれが尊重し合っている姿に、羨ましく感じました。

私は、今回の活動で日本にいては感じることでできないものにたくさん出会うことができました。この事業に参加してお世話になったすべての方々への感謝を忘れず、感じたことや思ったことをたくさんの方に伝えていきたいです。この事業に参加できたことは私の財産になりました。また、絶対にマレーシアに行きたいです。トゥリマカシー!!



(本人あり：前)
ホームステイ先の近くの川でマンディー、
日本でいう水遊び



(本人あり：真ん中)
ホストファミリーとマレーシアの伝統衣装を着て

団員が感じたこと

マレーシアが私にくれたもの

鳳凰高等学校1年

園田 春陽

今回の事業に参加して、本当に多くの方々の温かさに触れ、多くの「初めて」を体験し、人生で一番と言っていいほど充実した忘れられない一週間を過ごした。この事業に応募した理由は大きく分けて2つある。まず、日本にいてもテレビや本などで発展途上国について知ることができるが、自分の目で見ることが大切だと思い、現地の方と直接触れ合うことができるこの事業に参加しようと考えたからだ。また、引っ込み思案な自分を変え、海外の方とコミュニケーションが取れるような力をつけることの出来る貴重な機会だと思い、将来の夢を見つけるきっかけにしたいと考えたからだ。

今回、初めての海外で、初めての事業ということで正直、不安や緊張もあった。ホームステイ先に着くまで、私の拙いマレー語や英語だけでうまくコミュニケーションが取れるだろうか、ホストファミリーはどんな方々なのだろう、など、不安でずっと考えごとをしていた。しかし、実際に会ってみたら、とても明るく優しい方々で、私たちを熱烈に歓迎してくださった。ホストファミリーも私が不安にならないようにずっと話しかけてくださって、私も本当の家族のように安心して楽しく過ごすことが出来た。特にホストシスターのアインさんは、「私のことはカ力（マレー語で姉妹）と呼んで、姉だと思って！」と言ってくれて、寝る時までずっと、「寂しくない？不安なことがあったらなんでも言ってね」と話しかけてくれたり、マレー語やイスラム教についても教えてくれた。ホストファミリーの皆さん一人一人が私を気にかけてくださって、拙い英語でもコミュニケーションが取れた。美味しいご飯を作ってくれたり、いろんなところに連れて行ってくれたり、日本の文化も喜んで体験してくれたり、とても短い期間だったが濃い思い出がたくさんできた。笑顔でお別れをしようと思っていたが、ホストファミリーに抱きしめられた瞬間から涙が溢れて止まらなかった。とても濃い4日間だった。ホームステイ先ではもちろん、現地の学校やお店などでも熱烈的な歓迎を受け、どこへ行ってもマレーシアの方々は笑顔で挨拶をしてくれて、改めてマレーシアの方々の温かさを実感

した。

今回の事業ではマレーシアの発展途上国としての課題も知ること出来た。首都クアラルンプールには高層ビルが立ち並び、発展途上国という感じは全く無かった。しかし、現地で JICA 派遣員として活動する谷口亮隊員の話では、まだトイレの整備や、ゴミ問題など衛生環境が悪かったり、麻薬の使用や暴力が日常的に起こってしまっている貧困地域もあると知り、大きな格差を感じた。中でも、幼少期から民族間の強い差別意識があることを知り、深くショックを受けたと同時に差別をなくすために何が出来るだろうと考える貴重な機会となった。

この充実した7泊8日を通して、新しいことを恐れずに挑戦する力をつけ、参加前より一回りも二回りも成長出来た。私を支えてくださった全ての方々に感謝したい。テレマカシ バニャック！



(本人あり：左)
ホストシスターの娘のハナ(右)と
ホストブラザーの息子のアニ(中央)



(本人あり：左)
ホストシスターがラクサをご馳走してくれた

団員が感じたこと

またいつか会える日を願って

霧島市立陵南中学校1年

村上 由佳

今回私は初の海外であり、初めて家族がいない7泊8日をマレーシアで過ごした。

日本に帰国後は、マレーシアに帰りたくて仕方なかった。それぐらい、私はマレーシアが大好きになった。

日本を出国する前は、発展途上国に対する偏見や家族と離れる不安があったが、そんな思いはマレーシアの色々な雰囲気や塗りに塗り替えられた。実際のマレーシアは、思っている以上に発展していた。その一方で、過疎地との地域格差も感じた。

マレーシアは、とても食に恵まれている国で、普通の量の食事を1日に5回もする。

1日3食の私達には考えもしないことだ。

マレーシアでは、「マンディー」という入浴があります。一度目は、他のホストファミリーの家でお別れ会をした時に洋服を借りて川に入り、「リバーマンディー」をしました。二度目は、私のホストファミリーの家の前にある川で着の身着のまま入るように言われ、戸惑いましたが日本ではできない経験なのでチャレンジしました。4日目に行った青年海外協力隊活動視察では、実際に活動している谷口亮隊員の「困った事があったら、頼っていいんだよ。たくさんの人に頼って、たくさん助けてもらいなさい」という言葉を聞いて、心を動かされた。勇気を持って実際に活動できることは、すごいことだと改めて思った。

実際にマレーシアへ行くことで、私が思っていた発展途上国への偏見が覆され、親へのありがたみと共に、自主自立を学ぶことができた。また、まだ差別が残っていることも知った。日本がいかに恵まれているかと、実感した。

今のマレーシアの現状を知っている人は少ないと思う。だからこそ、マレーシアの事をみんなにもっと知ってもらいたいと思った。私が実際に行って、見て感じたことを家族や周りの人にたくさん教えたいと思います。そしてたくさん知ってもらい、大好きになってほしいです。また、青年海外協力隊という素晴らしい活動にも興味をもってほしいと思った。

私はこの事業に参加してよかった。参加したことで、色々なことへの好奇心が増えて、新たに夢も増えた。

将来は、青年海外協力隊員として活動に参加し、様々な国の文化や習慣などを学び、途上国の問題解決に少しでも貢献したいと思った。

村とのお別れ、ホストファミリーとのお別れでもある。私は朝から急いで、マレー語で手紙を書いた。渡したときに凄く喜んでくれた。バスに乗る前の限られた時間で、感謝の気持ちを伝えるのは難しかった。最後にシスターが、「貴方は、私の大事な妹」と言ってくれた。私はその一言で、ホストファミリーとの、たくさんの思い出ができた。最初の日不安で泣いてしまったことや、一緒に動物園に行ったり、お互いに自分たちの言語を教え合ったりしたあの日々が、もう終わりなんだと思うとたくさんの大粒の涙がこぼれ落ちた。シスターやマザーに抱きしめられ、もう帰りたくないと思った。

バスが出発するとき、またマレーシアに帰ろうと心に決めた。



お別れの日の朝ごはん



(本人：前真ん中)
村との別れ前日の夜 ホストファミリーと

団員が感じたこと

マレーシアでの学び

鹿児島県立吹上高等学校2年

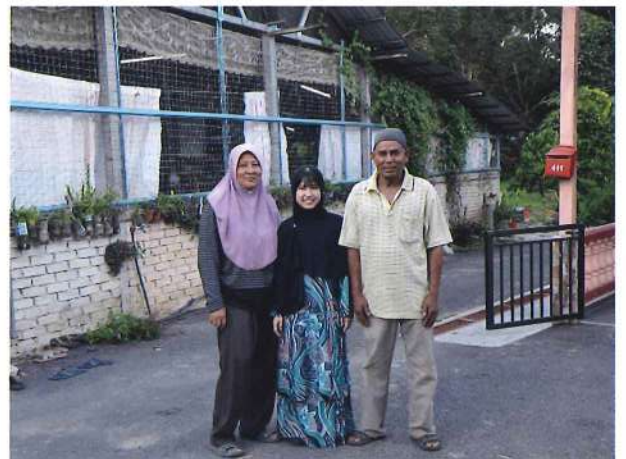
前野 優夏

主にマレー人、華人、インド人が各々の文化を持ち共存しているマレーシア。以前から興味を抱いていた国で、今回有難いことにマレーシアを訪れる機会を得ることができた。自宅を出て15時間、クアラルンプール国際空港に降り立つと、発展途上国ということを感じてしまうほどそこには煌びやかな光景が広がっていた。身体は疲れていたが、明日からのホームステイや、学校訪問、現地の方との交流、マレーシアでしか得られない経験に思いを馳せ、とてもワクワクしていたのを覚えている。

発展途上国と聞いて、貧しく、ライフラインの整備が整っていないイメージであった。ペラ州レンゴン地区を訪れると、日本と大差ないほど整備され、ホームステイ先ではシャワーや扇風機、クーラーもあり快適に過ごすことができた。しかし、JICAの谷口隊員の住む地域ではライフラインの整備不足と同時に、そこではルールがほとんど存在しないために、団地の中から道へゴミを投げたり、サッカーのルールを知らず、ボールを奪われ友達を殴ったり、子供たちは排泄物の上で遊ぶのが日常だと聞き写真も拝見したが、想像していた以上に衝撃的なものであった。谷口隊員はその地域で、障がい者や子供たちへの支援を行っており、勉強を教えたり、友達を作るきっかけ作りや、様々なことを経験してもらう場を設ける活動を行っているとのことであった。日本では幼少期より生活の中でルールを身につけるため、改めてルールについて考える機会が少ないが、そこでは遊びを通してルールについての重要性を伝えているそうだ。また LGBTQの方への人権がないとの話も印象的であった。日本でもまだ認知が浅く、LGBTQに偏見のある方も多くいるのが現状だが、マレーシアではイスラム教の戒律もあり、宗教による人権侵害もあるのではないかと感じた。彼らにとっての日常は私にとっての非日常で、発展途上国における衛生観念や地域格差、ルールの重要性、LGBTQの在り方について改めて考える機会となると同時に、私も何かしらの国際協力に貢献したいと思うきっかけとなった。

また、今回初めてホームステイも経験。ホストファ

ミリーは60代の夫婦2人であったが、毎日誰かが訪ねてきたり、誰かを訪ねたりと賑やかで、レンゴン地区では人と人との繋がりが濃く感じられた。言語的コミュニケーションは難しかったが、色々なマレー語を教えてもらったり、ジェスチャーや表情で意思疎通でき、言葉の壁を感じることも少なかった。ホストファミリーは本当に温かく、食の細い私に毎日たくさんの食事を用意してくれたり、日本ではあまり見かけることのない色々なフルーツを食べさせてくれたり、地域の方と触れ合う機会を設けてくれたり、伝統衣装のバジュクロンを着せてくれるなど、帰国日を先延ばししたいほどあまりにも濃く短く、思い出深い4日間のホームステイであった。ここでの経験は、人生の糧となり一生の宝物である。またの再会を楽しみに、terima kasih (ありがとう)。



(本人あり：真ん中) ホストファミリーと一緒に



ドリアンの種取りをしている様子

団員が感じたこと

マレーシアのおかげで

鹿児島県立加世田高等学校 1年

大渡 彩也華

私が特に印象に残っていることは、マレーシア人の温かさです。住んでいる国や話す言語も違う私をすぐに受け入れてくれて、コミュニケーションも、伝わりにくいのに一生懸命にとろうとしてくれて、そういうところが日本人には無い人の温かさなのかなと思いました。日本人は人見知りをしてしまい、落ち着いた感じで話し始めて、仲が良くなってきたら笑顔が増えていく感じだけど、マレーシア人は初対面でもとってもテンションが高くて、すぐに馴染むことが出来ました。そのおかげで私は不安しかなかったホームステイをしっかりと充実させることが出来ました。

私はマレーシアに行く前と今で考え方が少し変わりました。私のホームステイ先ではお風呂でお湯が出ませんでした。なので、泣きそうになりながら毎日お風呂に入っていました。でも、ホテルのお風呂や日本のお風呂ではお湯が出ました。その時、私はお湯のありがたさにとっても感動しました。日本ではお風呂のお湯が出るのが当たり前という考え方ですが、でも、世界中のみんなが必ず綺麗なお湯でお風呂に入れていないということに身をもって気づくことが出来ました。この気づきによって水やお湯を大切に使うという考えをしっかりと胸に刻むことが出来ました。

私はマレーシアでは1日5、6食食べることにすごく驚きました。日本では1日3食しか食べていなかったの、最初はとてもきつかったです。おやつみたいな感じで少しずつ食べると思っていましたが、5、6食全部がしっかりとご飯でした。私のホストファミリーはみんな優しくだったのでたくさん食べてと言ってくれたけど正直とてもお腹いっぱい、お腹がすいたという時間が無かったです。でも、どのご飯もとっても美味しくて、あきることなく食べることが出来ました。私はナシゴレンというご飯が1番美味しかったなと思いました。またマレーシアに行った時にも食べたいし、日本でも自分で作って食べてみたいです。

また、私はマレーシア人が英語を話していることにとても驚きました。マレーシアでは小学生の時から英語で授業を受けるので英語も話せるのです。マレー語と英語どちらも話せることはとてもすごいことだと

思います。日本人はごく一部のしか英語を話せないと思います。英語は世界共通語だと思うので、私たち日本人も英語を話せるようになった方が良いと思います。なので、私もこれから英語をしっかりと勉強していきたいと思います。

私はこれから、この体験授業で学んだこと感じたことを周りの人に伝えていきたいと思っています。また、英語の勉強をしっかりと英語を話せるようになりたいです。よりたくさんの人とコミュニケーションをとるためにも英語をしっかりと勉強していきたいです。青年海外協力隊として活動したいと思っているので、いろいろな勉強も頑張りたいです。

またマレーシアに行きたいです。なのでそのためにも、お金をたくさん貯めたり、マレー語の勉強をしたりといろいろと準備をしていきたいです。



(本人あり：真ん中) ホストファミリーとのお別れ



ホームステイ先のトイレとシャワーの様子

団員が感じたこと

幸せの在り方

鹿児島県立鹿児島中央高等学校2年

森田 遥香

日本を離れること。これは私にとって初めての体験で、とても有意義な経験となった。

福岡空港からバンコクを経由しマレーシアの首都であるクアラルンプールに着いた。街は電気がついて明るく、バスの窓からは見えない高さのビルやタワーに驚いた。私の気持ちは最高潮に達していた。しかし、ホームステイ先の村へ向かうにつれて、楽しみよりも不安が大きくなっていた。

村に着くと、多くのホストファミリーが私たちを歓迎してくれた。歓迎の仕方はマレーシア特のご飯のおもてなしだった。村に着いて早々右手を使ってご飯を食べた。そして、ホストファミリーの家に着いたら家族みんなが笑顔で出迎えてくれてとても嬉しかった。お湯は使えたが、たまに水が薄茶色く濁っていたり水圧が弱くなったりして綺麗な水に限りがあることを感じた。しかし、ホストファミリーと過ごしていくうちに不安はなくなっていく。私がホストファミリーと過ごして嬉しかったことは、色んな体験や場所に連れて行ってくれたことはもちろん、本当の家族、妹として扱ってくれたことだ。お姉さんたちは服や帽子、靴を貸してくれたり、さらにはコーディネートやお化粧までしてくれた。鏡の前に2人並んで化粧を落とした時は本当の姉妹みたいで嬉しくなった。言葉が通じないこともあったけど、英語やジェスチャーを使いながらお互いの気持ちを伝えることができた。お別れの日には、日本に帰りたくないと思うほどホストファミリーと村が大好きになり、私の第2の故郷になっていた。

現地の小・中学生と交流したときには、みんな元気で積極的で驚いた。折り紙を見せるとみんな興味津々に目を輝かせていた。一緒に折りながら兜や鶴を作った。何とか完成すると嬉しそうに眺めたり、兜を被ったりしているのを見て折り紙を折って良かったと心から思った。活動の合間にはマレー語を教えてもらったり、日本語を教えたりして異文化の相互理解を深めることができた。

この1週間を通して、私は「幸せ」の意味について改めて考えさせられた。日本を出る前は日本が1番快適で過ごしやすと思っていたが、マレーシアでもク

ーラーやテレビがない中で充実した生活を送ることができた。むしろ、日本で過ごすときよりも楽しく、幸せだった。現地の人たちもみんなで助け合いながら、毎日笑顔で幸せに暮らしていた。発展途上国だから「大変」、「生活するのに精一杯」と思っている人が少なからずいると思う。しかし、そう思っている人たちに「幸せ＝便利」という考えは違うと伝えたい。そして、日本に生まれてきたからこそ周りの方々、環境に感謝しながらいつかマレーシアに、ホストファミリーに恩返しができるように一生懸命勉強したい。最後に、マレーシアに行く機会を与えてくださった方々、一緒に活動してくれた仲間感謝です。テリマカシ（ありがとう）！！



（本人あり：真ん中）初めてのヒジャブ



作った兜を被っている様子

団員が感じたこと

私にできる第一歩

鹿児島県立市来農芸高等学校2年

加世田 美雪

私は今回マレーシア研修に参加して、自分が住んでいる世界は自分が思うより大きいと実感しました。

私は今まで、マレーシアについてほとんど知らなかったのですが、勝手に他の国とまとめて発展途上国という括りにしていました。ですが、実際には私たちが想像するよりもマレーシアは発展していました。あと数年で先進国と言われるようになるだろうと言われました。私が海外に行くのは今回が初めてですし、知っている国も20か国程度です。世界中には約200の国があります。その国それぞれに文化があり、伝統があり、発展状況や抱えている問題は様々です。私は現在先進国と言われる日本に住み、他の国の支援をできる立場にあります。今回は青年海外協力隊という活動を主に視察しましたが、他にも似たような活動は多くあります。ですが、どのような活動をするとしても、その国の状況を知らないままでは何もできません。なので、まずは存在する国それぞれの名前や場所、環境などについて調べて、それぞれの国を個々に認識できるようになりたいです。その上で実際に現地に行ってその状況を体感し、自分なりにできることを考えてみたいです。

また、この研修は私の将来を見つけるきっかけにもなりました。

私の将来の職業は農家の予定です。両親の経営している観光農園を継ぎたいと思っています。実家の近所で、外国人労働者が増えてきました。日本は少子高齢社会と言われています。そういった社会になっていく中で、外国人との交流は大切です。互いの言語を覚えることは大切です。ですが、母国語とふれあうことも大切だと思います。私は今回、ホームステイをして、ホストファミリーとマレー語でコミュニケーションを取りました。食事やシャワーなどのちょっとした会話はできたのですが、少し複雑な会話は難しく、必死に伝えようとしてしまし、相手も理解しようとしてくれますが、本当に伝わっているのか、相手が言いたいことを私が正確に理解できているか、とても不安になりました。そんなとき、日本語の通じる団員と会えると安心しました。それはどんな人でも同じだと思います。互いに言語を覚えることも大切だと思いますが、日本

に来たばかりで、初めて自分の言語が通じない環境は気が滅入るでしょう。そんなときに自分の母国語が通じる人が身近にいる、同じ国出身の人とふれあうきっかけがある。そう分かるだけでも安心できると思います。私は将来観光農園を経営しながら多くの言語を勉強し、鹿児島に来る、志布志に来る外国人の方にとって憩いの場を提供し、また、雇い主などと彼らの架け橋になりたいです。

私は今回の研修で様々な発見をしました。この経験を今後の生活に生かし、また、マレーシアの状況などを他の人に伝えていきたいです。今回の事業では一緒に同行した同伴者や同じ団員の方々との交流もでき、他の高校のことなども知ることができました。マレーシア研修以外でも私にとって有意義な時間となりました。



(本人中央) 入村式でホストファミリーと初めて会った私にすごく優しくしてくれました



クアラルンプールのツインタワー
クアラルンプールは東京と比べて見劣りしないくらい発展していました。

団員が感じたこと

「本当の楽しみ方とは」

瀬戸内町立古仁屋中学校3年

奥田 優希

僕にとって、日本人に生まれて、日本で育っていることが一番幸せなことだと思っていました。でも、そうではないのかもしれない。それぞれの国で、それぞれの楽しみ方があり、幸せの感じ方があるのだと感じた体験でした。

僕達がホームステイをした村は、クアラルンプールからバスに乗って高速道路を2時間ほど走ったところにありました。バスから降りて、公民館のようなところに行き、そこで入村式がありました。そこで、村長さんのような方が挨拶をされました。本当に心から歓迎されていると感じました。参加者が一人一人点呼され、僕が呼ばれ、前の方にいくと、ホストファザーが出てこられました。「Nice to meet you」といったら、ホストファザーも笑顔で「Nice to meet you too」と言ってくれました。また、二人が並んだら、会場が笑いにつつまれました。なぜみんな笑っているのだらうと思ったら、シャルールさんが私に英語で「tall tall」と言ってくれて、身長差があるから、みんな笑っているのだと気づきました。そんな風に明るく僕達を迎えてくれました。

ホストファザーの家族は6人家族でした。ホストファザーは英語も使えるので、僕はかなり助かりました。家族には、日本からプレゼントをもってきていました。けん玉をととても気に入ってくれて、ホストファザーがさっそく練習をしていました。

青年海外協力隊の方がおられる小学校に行きました。小学校では大歓迎を受けました。僕達は、国歌とドラえもんの歌を歌いました。ドラえもんはマレーシアでもとても人気のある番組で、「とっても大好きドラえもん」の歌詞のところは、マレーシアの方も大きな声で歌ってくれました。帰りは、小学生がバスまでの道に並んで花道をつくってくれて、もうそこで涙を流している人達もいました。次に中学校を訪問しました。中学校では5人一組に分かれて、マレーシアの中学生と一緒に体験学習を始めました。葉っぱで製作をする班、アラビア語の学習の班。習字の班、等でした。

ホームステイ先では、毎日色々な所につれていってもらいました。動物園、イオン、ナイトマーケット、

夜景、川でも泳ぎました。朝は6時に起きて、寝るのはいつも2時ぐらいでした。そのくらい毎日が充実していて、昼間はあまり眠たくありませんでした。内容が濃く早く過ぎた4日間でした。

日本に帰る飛行機の中で、今回の体験を振り返り、本当に充実した毎日だったなと思いました。もっとマレーシアにいたいなと、思いました。ホームステイ先の家族の優しさ、村の人達の温かさを感じる数日間でした。僕達への接し方は、思いやりとリスペクトがありそれが伝わってきました。

この事業に協力してくれた多くの方に心から感謝しています。相手を思いやる優しさ、温かさを発揮できる人になりたいと思えるようになりました。一生忘れることのない体験になりました。ありがとうございました。



(本人あり：右から2番目) ホストファミリーとの写真



(本人あり：左から2番目) ろうを使った作品作り

団員が感じたこと

新しい価値観や視野

樟南高等学校3年

井上 心結

マレーシアという国が私の人生において初めての海外となった。日本から一歩外に出て、初めて海外を知ることによって私自身の思考の幅が広がると共に視野も広がる経験を積むことが出来た。今回の派遣事業を通して今後自分がどういうことをしたいのか、どの分野で貢献したいのか、将来像が明確になった。

私はこの経験から学んだこと、感じたことが二つある。

一つ目は、言葉の壁は大きいようで小さいことだ。この事業では、1世帯1人で泊まるホームステイを実施しているそうだ。首都からバスで1時間半かけてホームステイ先まで行く道のりは不安との闘いだった。村に到着しバスから降りると村の方が盛大に歓迎してくれた。ホストファミリーとの対面式でも優しく微笑みかけてくれたおかげで不安が飛んでいき、4泊のホームステイが楽しみへと変わっていく瞬間だった。

マレーシアでは公用語がマレー語であるため会話はマレー語で話さなければならない。事前研修で挨拶や日常で必須となるマレー語は学んだのだが、いざ現地の人と話をすると、言葉が詰まる場面があった。英語とマレー語を使って話をしたり、指さし会話帳を使って話をした。私の拙いマレー語と英語を理解してくれようと最後まで聞いてくれて初日から最終日まで優しさで溢れていた。ホストファミリーと沢山会話をする事ができたが私のマレー語力、英語力があれば更にコミュニケーションを図る事ができていたなと後悔した。言語の壁は、お互いが相手と会話をしたいと思えば言葉の違いは関係ないと実感したが、会話を向上させるためには私自身の英会話力を上げる必要があるなと実感した。

二つ目は、現地で活躍している3人の青年海外協力隊の方と会い、話を聞き国際協力に興味を持つことが出来たことだ。国際協力とは国際社会全体の平和と安定、発展のために、発展途上国・地域の人々を支援するところだ。私は、国際協力をする人を尊敬し、同時に自分と無縁なのだろうと思っていた。障害者が働けるように企業に交渉する方と食事を取りながら話をすることがあった。日本では、障害者に給付する障害者手

当や障害者雇用促進法43条に従業員を43.5人以上雇用している事業者は、障害者を1人以上雇用しなければならない法律がある。しかし、マレーシアでは日本のような法律がないため、家族に障害を持った人がいる際は、家族で養っていくそうだ。その話を聞き、日本は、障害を持っている人でも自立して生活できるような仕組みになっているのだと気付いた。国際協力をする事は、お互いの価値観を受け入れ合い、更に技術力を高め、その国が発展するための助け合いなのだと実感した。このように、海外に行くことで知ることの出来た自国の良さや、海外で働いている方の話を聞くことが出来て将来私も青年海外協力隊として世界で活躍したいと思った。1週間という短い間だったのですが、とても濃い1週間を送ることが出来たのも沢山の方々のおかげだということを忘れず、これからの人生への糧にしたいと思った。



(本人あり：左) ホストファミリーとのお別れ



(本人あり：右) 青年海外協力隊視察

団員が感じたこと

Seeing is believing

鹿児島育英館高等学校1年

徳永 理咲

“Seeing is believing.”

この事業に参加して改めて実感したことだ。マレーシアの人々、文化、宗教…私が思っていた考えとは大きく異なっていた。

私は初めてのホームステイに期待と不安で胸がいっぱいだった。しかも田舎でのホームステイと聞いて、赤土のどぼろ道に、穴の空いた和式トイレなど勝手に良くないイメージを持っていた。しかし実際に訪問してみると、道路は整備され、トイレも洋式できれいだった。家も広く、思っていた以上に環境が整っていてとても驚いた。また、ホストファミリーは私を本当の家族のように迎え入れてくれた。困っていたらすぐに助けてくれ、いつも笑顔で優しく接してくれた。彼らの温かいおもてなしに、あっという間に不安が和らいだ。でも、一つだけ壁にぶつかったことがあった。それは、マレー語しか通じないホストマザーとうまくコミュニケーションが取れなかったことだ。言葉が通じないもどかしさもあったが、彼女は身振り手振りでマレー語を教えてくれ、一生懸命伝えようとしてくれた。私も彼女に伝えたい気持ちがどんどん強くなり、積極的にマレー語を調べて使った。すると、だんだん心が通じ合うようになり、別れる時は本当に辛かった。私は、相手に伝えようとする気持ちや理解しようとする姿勢を持つことの大切さを知った。

私にはこの事業で挑戦したいことがもう一つあった。それは奄美の島唄だ。私は小学校の頃、奄美大島に6年間住んでいて島唄を習っていた。「言葉は通じなくても、島唄で楽しい交流ができた。」と、以前この事業で島唄を披露した兄がとても嬉しそうに話していた。その姿を見て、私もいろいろな国の人に島唄の良さを伝えたいと強く思った。ホストファミリーのおかげで、私は4回も島唄を披露することができた。みんなが真剣に聴いてくれ、唄い終わると会場いっぱいに響き渡る大きな拍手をしてくれた。私は、海外で三味線を弾きながら島唄を披露することが初めてだったので、大きな達成感に満ち溢れた。また、島唄を披露する前は現地の人とあまりコミュニケーションを取れていなかったが、島唄を通してたくさんの人と話せて仲良くな

れた。音楽には心と心を繋ぐ不思議な力があるのだと思った。私は、これからも海外の人に大好きな島唄の魅力をもっと伝えていきたい。

私はこの事業で、自分の思い込みや先入観にとらわれず、実際に自分の目で判断することの大切さを学んだ。マレーシアの文化を肌で感じ、マレー人と接することでたくさんのことを学び、気づくことができた。また、JICAの活動を視察し、私も将来は国際協力に携わりながら人の役に立つ仕事に就きたいと思った。そのためにも自分の視野をもっと広げ、より多くの世界を知り、私にできることを探していきたい。そして、いつか私の夢である青年海外協力隊の一員としてまたマレーシアに行きたい。

最後に私にこの貴重な経験を得る機会をくださり、支えてくださった全ての皆様に感謝したい。Terima kasih !



(本人あり:右) ホストシスターと



(本人あり) 中学生との交流会にて

マレーシアでの学びが 「Build Your Dreams」

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 事務局長

弓場 秋信

出発の朝、第30回目の事業が実施できることに深い感慨を覚えると共に過去の事業が走馬灯のように頭をよぎった。毎回変わるホームステイ先、可能な限り団員一人でのホームステイ、看護師やマスコミの同行、事前研修の充実など。これらへの拘りが、本事業の継続へと繋がり30回目を迎えている。

先進国の仲間入りを目指し経済発展が続く首都クアラルンプールから北バスで約3時間、自然豊かなホームステイ先ペラ州レンゴン地区の集会所に到着。ホームステイ受け入れ家族や地区の関係者の歓迎を受け入村式に臨んだ。団員は、早速マレー語の洗礼を受けるも、優しい家族の眼差しに安堵し夫々のホームステイ先へと向かった。私は入村式で家族に果物の王様ドリアンが大好きだ、と話したせいか食事の前に完熟ドリアンが3個もテーブルに置かれた。同行者の怪訝な顔をしり目に天にも上る気持ちで早速頬張ると、その美味しさにマレーシアを実感した。

今年の2月、小学校の先生を退職した鹿児島市在住の田ノ畑さん66歳が、パスポートを初めて取得して、協力隊員としてペラ州に赴任した。任地出発前に協力隊志望動機を伺い、その意識の高さに感激し今年の派遣先をマレーシアとした。ホームステイ先から約2時間バスで移動、田ノ畑さんが活動中の小学校に到着すると、校長先生・地区教育委員会・児童の大歓迎を受け団員に笑顔がこぼれた。現地小学生の民族舞踊の披露、鹿児島側のマレー語の歌を含む日本の歌紹介そして田ノ畑さんの活動報告を続いた。学校側の心温まる対応に田ノ畑さんの人柄と活動内容への評価が見て取れた。

翌日、青少年活動で派遣されている谷口隊員の活動現場を訪問した。同隊員の活動報告の中に、今まで知る機会の少なかったマレーシアの社会的弱者の現状が紹介された。経済的発展を続ける中で取り残された人々、価値観の変化に戸惑う若者。これらの課題に真摯に向き合っている隊員の姿は、眩しく頼もしく感じた。

協力隊員の活動現場訪問の他にレンゴン地区中学校を訪問した。事前の情報では私達の訪問が放課後にな

る為、ひとクラスのみとの交流と聞いていたが、校長先生を始め殆どの生徒が残り大歓迎を受けた。指差しマレー語会話帳を片手に英語を交えての文化紹介と同世代同士の語らいは、予定時間を忘れての交流となった。

ホームステイ1日目の夜、全てのホームステイ受け入れ家庭を訪問し謝意を伝えると共に不都合がないか団員と家族に尋ねた。そして3日目の夜、再度訪問し村の現況を見聞した。人口約3000人のマレー系住民が殆どのレンゴン地区は、経済環境の変化に対応すべく米作からゴム農園と果樹栽培に転作が進んだとの事。また退職後に故郷に戻り第2の人生を楽しむ人も少なからずいる自然豊かなロングステイしたくなる村であった。

団員15名は、7泊8日の中で、将来の進路、生き方、言語、宗教、価値観、民族等について考えさせられた。この事業での学びが、団員の夢の実現（Build Your Dreams）に活かされることを願っています。



食後のデザートにドリアン



ホームステイ最終日のお別れ会（本人左から2番目）

同行者が感じたこと

マレーシアでのホームステイ

(公財) 鹿児島県国際交流協会 総務企画課長

藤井 一彦

私がホームステイでお世話になった所はマレー人が多く暮らしている村で、午前5時頃には、大音響で流れるコーランの章句で目が覚める。子供たちも早起きで、起床後は、「mandi」(日本的には水風呂)で身体の汗を流し清め、朝食後まだ薄暗い中、親が運転する車やバイクで通学する。中には、バイクの後部座席に子供2人、ハンドルの前に子供1人乗せて運転している母親もいた。しかもノーヘルで。日本では見かけない光景ではあるが、この村ではこれが当たり前のようだ。子供も年齢に関係なくバイクの運転ができれば、親からバイクを買い与えられる。私のホスト宅にはバイクが4台置いてあった。

昼間の日差しが強いのは当たり前であるが、朝夕は意外と涼むことができた。村人は午後8時を過ぎる頃になると、車やバイクで近くのドライブインに出かけ、軽食やジュース、シュガーたっぷりのコーヒーを飲みながら、家族や友人と楽しいひとときを過ごす。たまには午前様になることもあるらしいが、イスラム文化圏の村では二日酔いになることはない。

私がお世話になったホスト夫婦は、履歴書によると、ファザー(私より年下ではあるが):46歳、マザー:45歳と若く、子供が5人もいるのだが、職業欄にはファザー:「退職」、マザー:「主婦」となっている。どうやって生計を立てているのか気になる。

ファザーは19歳で陸軍に入隊し、軍の規則により23年間従軍、3年前に除隊したそうだ。2013年にサバ州北部の村をフィリピンのイスラム武装勢力が不法占拠したことで紛争が勃発し、マレーシア軍の勝利となったものの、彼の部隊の殆どの兵士が亡くなるという銃撃戦を経験したそうだ。「兵役中は、家には帰れず、妻や子供たちに心配や苦勞をかけた。子供たちが成長するまでは一緒にいたい。」とその時思ったそうである。時折見せる厳しい顔とは裏腹に、子煩悩な父親である。彼の今後の人生設計をじっくり聞きたかったが、なかなかその機会もないまま村を離れる日を迎えた。

時間が惜しかった。朝5時、早めに朝食を済ませ、ホームステイと毎日の送迎の御礼を言った。そして、子供たちに接して感じていたこと、「子供たちはあな

たの背中を見て立派に成長していると思う。とても素晴らしい家族だ。」ということを伝えた。

ファザーは「グッド!」と親指を立て、「また、マレーシアに来ることがあったら、ぜひ寄ってくれ。今度は嫁さんも一緒に。そして、皆で"Drink"しよう。」とニコッと笑った。何故か目頭が熱くなるのを感じた。

4日間の短いホームステイではあったが、ホストファミリーには本当にお世話になった。おかげでイスラム文化圏の村の生活を経験することができ、心から感謝したい。

最後に、今回のマレーシアでの貴重な体験は、必ず団員の一生の財産になると思う。これを糧として、将来の鹿児島、日本を担う人材に成長して欲しいと思う。緊張とストレスの毎日ではあったが、素敵な8日間に同行させていただき本当にありがとうございました。



約100年前に建てられたモスク



ホストファミリーとDrink(郊外のレストランで)

同行者が感じたこと

JUMPALAGI

～またいつかどこかで～

青年海外協力隊 OV

北田 尚子

31年前の夏、私がマレーシアで青年海外協力隊員として活動していた時に、この事業で鹿児島県から中高生がやってきた。私の活動視察はかなわなかったが、私は団員が泊まるホテルで合流し、行動を共にした。今年は、近年コロナ禍で行けていなかったこの事業が30回目の節目を迎えるにあたり、初回で訪れていたマレーシアに派遣したいとのことでお手伝いすることになった。受け入れた側が今度は受け入れてもらう側へ、なんとありがたい縁だろう。

第一回目研修はあっという間に終わり、第二回目研修も天候不良のため、宿泊なしで時間を大幅に短縮しての実施となり心配したが、それでも私は団員を信じていた。必ず笑顔があふれる時間になると思っていた。

いよいよホームステイ先へ。多くの団員がホームステイがとても楽しみという一方で、同時に不安に感じているのも伝わっていた。予定より少し遅れての到着となってしまったが、大歓迎ムードでほっとする。ホストファミリーと団員を引き合わせる時に、背が高い、低いというだけで笑いが起きていたのはマレーシア側もテンションマックスになっていたのだと思う。良かった、どの家族も優しい人たちばかりだ。少しほっとした。家や家の設備については多少の当たり外れがあっても仕方ないけれど、家族についてはみんなが当たりであって欲しかった。

その夜は同行者6名で団員15人全員の家を回った。不安そうな団員、まあまあ元気そうな団員、それぞれだったけれど、私は大丈夫と感じていた。3日目の夜は私たちの見回りを希望する団員はいなかった。たった3日なのに、もうたくましい。

色々な手違いがあって、自由行動の日やお別れ会の夜、ホストファミリーと離れてしまった数名の団員がホストファミリーと電話で連絡を取りたいと言ってきた。皆自分で話をすると言う。私は本当に嬉しかった。私はマレー語が話せるけれど、私の出番など少ない方がいい。困った場面ではちゃんと頼ってくれ、自分でやれる時はやってみる。私はそういう団員たちを本当に頼もしく誇らしく思った。迎えに来たホストファミリーを見てほっとした表情になった団員たち、ホスト

ファミリーと楽しそうに笑う団員たちを忘れない。

君たちは大丈夫。これからいろんなことがあるけれど、だいじょうぶ。恐れることなく世界に飛び出してほしい。信じている。

今回の派遣は個人的にも嬉しいことがたくさんあった。田ノ畑隊員の視察で子どもたちが歌ってくれた『幸せなら手をたたこう』のマレー語バージョンは私が隊員だった頃、他の福祉隊員と講習会を開き、広めていったものだ。谷口隊員の活動場所の責任者は、私の少し後の今でも連絡を取り合う隊員から学び、現在まで変わらず障がい者に関わっている。他にもあちらこちらでつながりが分かり、とても感慨深い日々だった。JICAの活動は根付いている。

今回このような機会をいただき心から感謝している。本当にありがとうございました。

また会いましょう。



(本人あり：真ん中) ホストファミリーと



「幸せなら手をたたこう」を歌う団員

同行者が感じたこと

マレーシアを通して感じたこと

青年海外協力隊 0V

五反田 えりな

マレーシアに降り立った時の第一印象は、都会！

首都クアラルンプールは高層ビルが建ち並び、多くの屋台や店で電子マネー使用が可能、他インフラ整備が成されていた。コロナ禍で急速に IT 化が発展したというマレーシア。ホームステイ先や現地中学生との交流時で多くの人がスマートフォンを所持し、多くの家庭が WiFi の設置や冷蔵庫や洗濯機、車やオートバイを所有しており、自分の途上国への勝手な偏見に気づかされた。

現地中学生との交流や、協力隊員活動先、ホストファミリーと行く先々で手厚い文字通りの大歓迎を受けた。ホームステイ先の村では、家族なのかかわらないくらい村人の絆が強く、村全体が一つの家族のようだった。マレーシアでは1日6食とる文化があり、村で常時満腹で過ごし、村や近隣の案内や伝統衣装を「これ着てみて！」と着せてもらい、その衣装を「あげる。日本で着てね。」と頂くなど、こうしてあげたい！というマレーシアの人々の熱いおもてなしの心と優しく温かな人柄を感じる日々だった。他にもイスラム教徒の村人たちと過ごすことで、女性でもバイクに乗り、ズボンを着用するなど私の過ごした事のあるイスラム教徒の生活様式が国や文化、歴史等で異なることを感じた。

障害児教育で活動している田ノ畑隊員の活動先では、学校内に障害児も学べる環境があると知り、現地中学生との交流などで文化や教育を見学できた。

マレーシアとはなんと素敵な国なのだろう！と感動していたが、青少年活動の谷口隊員が活動する団地住民の生活を聞き、捨てられた残飯などの上を裸足でサッカーをしていることや、過酷な生活環境に置かれている家庭もあり、衛生面や貧困、虐待、麻薬等の薬物使用など問題があることを知った。ホームステイ先では小さな子供が親を突然死や事故で亡くし叔父や叔母、祖父母に育てられているとの話も聞いた。大きく発展している印象を受けたが、生活習慣病の増加など予防医学や都市と村での医療アクセスの格差、他多くの問題がある事を知り、体験事業を通して異文化含め学び、自分にできる事とは幸せについて考えさせられた。

団員の出国前の緊張した姿が、マレー語やボディーランゲージでのコミュニケーションに奮闘しながら笑顔に変わり、ホストファミリーとの時間を大切に過ごし、別れの時にはまだここに残りたいと涙を流し、やり遂げた表情で帰国した姿を目の当たりにし、胸が熱くなった。この事業での多くの出会いと経験が未来の団員や自分自身にどう影響するかとても楽しみである。

今回コロナウイルス感染流行が沈静化し事業再開され、デング熱流行の情報もある中で出発となった。しかし同行中も日本でこの事業を支える方々や同行者のお力を感じ、体調不良に心配した団員もいた中、JICA マレーシア事務所の助けも得られ、団員それぞれに乗り越え変化していく団員の姿に私自身励まされ助けられた。そして皆が無事帰国できたことに感謝したい。今回出会えた皆さんへ感謝！テリマカシー！



村のみんなとお別れ



(本人あり：左)
伝統衣装のバジユクルンを着せてもらう

同行者が感じたこと

ジュンパラギ、マレーシア！

南日本新聞社 報道部 記者

中野 あずさ

夜明け前、集落一帯に響き渡るアザーン。イスラム教徒（ムスリム）に礼拝を呼びかける朗唱だ。ホームステイ先がモスク（礼拝所）の近くだったこともあり、厳粛な雰囲気包まれて朝を迎えた。

滞在中は、イスラム教が住民の生活に根付いていると感じる場面が多かった。印象的だったのは女性の服装。戒律で家族以外の男性に肌や髪を見せることが禁じられている。どんなに暑い日でも長袖で、頭は「トダウン」というスカーフで覆っていた。

ここ数年、アフガニスタンのタリバン政権が女性の教育を制限したり、イランでスカーフの着用を抗議するデモが起きたりとイスラム教の人権を巡る報道が相次いでいる。全てのイスラム教が女性を抑圧するわけではないと理解していたが、マレーシアの現状に関心があった。

レンゴンの人たちになぜ熱心に信仰するのか問うと、30代女性は「このイスラム教は中東のテロリストとは全く関係ない。女性を大切にするとし、20代男子大学生は「宗教は人生の中で一番重要」と答えた。彼らにとって教えを守ることが、正しく生きる「指標」になっていると感じた。

ふと、鹿児島県内のムスリムの暮らしが気になった。モスクやムスリム向けのハラルフードを扱う店が十分に整っているとは言えない。在留外国人が増える中、住みよい街づくりは進んでいるのか。注視し続けたい。

現地の青年海外協力隊との交流は発見の連続だった。ペラ州で障害児支援にあたる田ノ畑祥一さんは、昨年3月に鹿児島市の特別支援学校を退職後、66歳でマレーシアに渡った。東日本大震災でのボランティア活動や、アフガニスタンなどで医療活動に尽力した故・中村哲さんの言葉をきっかけに、「世界のために自分ができることは特支だ」と隊員を志したという。

若い団員の皆さんがたくましく成長し、夢に向かって道を切り開く姿をうらやましく感じていた。一方で新しい舞台で奮闘する田ノ畑さんの姿に、挑戦を“遅すぎる”と気後れすることはないと思い直した。社会人になって、何かに挑戦する機会はめっきり減った。

“一歩踏み出す勇気”を持ち続けたい。

ケダ州の谷口亮さん（青少年活動）、田中健志さん（障害者支援）からは、首都・クアラルンプールとの経済格差や、障害者の就労支援など山積する課題を教わった。実際に解決に取り組む隊員の言葉には重みがあり、先進国入りの難しさを痛感した。ロシアのウクライナ侵攻は日本に原油価格の高騰をもたらし、世界の問題は国境を越えることが浮き彫りになった。遠い異国の出来事と思うのではなく、自分事と受け止めた。

村を離れる朝、ホストファミリーとの別れを惜しむ団員の姿を見て自然と涙がこぼれた。娘のようにあたたく受け入れてくれた家族と、「二度と会えないかも」と思ったからだ。先日、パッチ（おじさん）から「いつでも帰っておいで」とメッセージが届いた。いつか必ず、会いに行きたい。ジュンパラギ（また会いましょう）、マレーシア！



（本人あり：右）ホストファミリーと



（本人あり：真ん中）取材の様子

同行者が感じたこと

異文化に飛び込んだ夏の1週間

KKB 鹿児島放送 報道情報センター ニュース部 記者

田上 晶

マレーシアに出発する前、どんな国で、どんな人が住んでいて、歴史などについて、自分なりに調べて、出発の日を迎えました。現地に到着すると、「百聞は一見に如かず」という言葉を身をもって感じました。クアラルンプールの高層ビルに圧倒され、道路はきれいに舗装され、歩く人や流れる音楽は現代的、私の持っていた古典的な印象は180度変わりました。そして、事業のメインであるホームステイ。村は自然豊かで、確かに日本と環境は違えど、住居は人が住むには充分で、通信環境などは日本よりも進んでいる家庭もありました。入国してから驚きの連続でした。ただ、一番の驚きは、現代的なものではなく、人の温かさや優しさでした。人のために奉仕すること、行動することをいとわず、笑顔で接してくれる村の人には言葉を超えて、人間として尊敬の念を抱きました。そしてその人たちの生活にはイスラム教という宗教が密接に関係していることも生活を通して感じました。モスクでの1日5回のお祈り。実際に村の人がモスクでお祈りをしている場を見に行きましたが、普段接する時とは少し違うものを感じました。緊張感という言葉が正しいのか、厳かな場で見せる表情は、私の背中がピシッと伸びるような感覚を覚えました。村の人のイスラム教への信仰心を、私がすべて理解することは難しいですが、モスクで見た表情や感じた空気は、日本では感じるもののないものでした。

最後に、団員の現地での姿についてです。

印象に残っている団員の姿はたくさんありますが、1つはホームステイの村に向かう前の表情です。緊張と不安と心配、1人では抱えきれないぐらいの思いをもって、これからホームステイに向かっている姿が忘れられません。到着すると入村式での大歓迎、現地の人の温かさに触れたあとの団員の安心した表情。1時間前の緊張した面持ちが嘘のようでした。少しのきっかけで、みんなは大きく成長していくんだなと感じた時でした。2つ目はホストファミリーとの別れの時間です。思いが溢れて涙を流す姿を逃すまいと、必死にカメラを回していました。落ち着いて映像を見返すと、私の心にもジーンとくるものがありました。その

涙は、別れるさみしさもありましたが、一番はホストファミリーへの感謝の涙だったんだろうと、感じました。色んな思いを包みこんでくれて、「第二の家族」のように接してくれたホストファミリーへ感謝を伝える団員の姿は、また一段とたくましく、そして人間としての優しさを蓄えているような印象でした。教科書では学べない生身の経験だからこそ味わえるこの瞬間を、この年齢で味わえている団員が羨ましく思いました。そんな姿をもっと上手に撮りたかったという取材者として悔しい思いもあります。私自身もこの経験をこれからの仕事に活かしていきたいと思います。こんな素晴らしい経験をさせてくれた15人の団員、そして同行者、事務局の皆さん、その他関係者の方々に心より感謝いたします。



(本人あり：右) モスクを案内してくれた人との1枚



(本人あり：真ん中) 印象的だった別れのとき

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

1 趣 旨

鹿児島県の青少年を発展途上国に派遣し、その国づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動現場の視察や現地での協力活動を行うことで、国際協力に対する理解を深めるとともにホームステイや学校、施設などでの交流を通して相互理解を深め、国際性豊かな人材を育成する。

また、派遣後は、これらの体験を報告会などを通して学校や地元に戻元し地域レベルでの国際化に寄与するものとする。

2 事業主体

主催：「鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会」

※構成団体：鹿児島県青年海外協力隊を支援する会

青年海外協力隊鹿児島県OB会

公益財団法人鹿児島県国際交流協会

共催：鹿児島県内の関係市町村

後援：鹿児島県、鹿児島県教育委員会、独立行政法人国際協力機構九州国際センター

協賛：鹿児島県内の企業

3 派遣先

派遣国はアジア諸国を対象とする（実績は別紙参照）

4 派遣者

参加者：県内各地から募集・選考した15名の中学生、高校生

同行者：実行委員会関係者と新聞社、テレビ局など報道関係者

5 実施時期

7月下旬～8月上旬の間の1週間程度

派遣の前後に事前研修会、表敬訪問、報告会なども実施

6 経費

この事業の実施に要する経費は、実行委員会の構成団体、協賛企業、共催者（参加者に対する助成金による方法を含む）及び参加者が負担する。

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の実績

	派遣国(地域)	派遣期間	人数 (生徒数)	参加者の出身市町村・共催市町村	備考
第1回	マレーシア (クアラルンプール、マラッカ)	平成3年 (水)～4/3(水) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市、阿久根市、名瀬市、市来町、 伊集院町、祁答院町、内之浦町、佐多町	公募
第2回	マレーシア (スラバワ)	平成4年 (金)～4/3(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市、鹿屋市、大口市、指宿市、 隼人町	公募
第3回	マレーシア (クアラルンプール、マラッカ)	平成5年 (金)～7/30(金) (7泊8日)	17名 (10)	鹿児島市、加世田市、三島村、隼人町、 志布志町、高山町	公募
第4回	インドネシア (バタヴィア、パシール)	平成6年 (月)～8/7(日) (6泊7日)	15名 (9)	鹿児島市、出水市、指宿市、垂水市、菱刈町、 霧島町	公募
第5回	マレーシア (クアラルンプール)	平成7年 (日)～8/6(日) (7泊8日)	16名 (10)	鹿児島市、国分市、頤娃町、宮之城町、隼人町、 吾平町、根占町、中種子町	公募
第6回	マレーシア (タピス、バリスムン)	平成9年 (日)～8/3(日) (7泊8日)	16名 (11)	鹿児島市、串木野市、東市来町、伊集院町、 郡山町、日吉町、吹上町、金峰町	市町村推薦
第7回	マレーシア (クアラルンプール、マラッカ)	平成10年 (日)～8/2(日) (7泊8日)	25名 (20)	鹿児島市、大口市、国分市、菱刈町、 始良町、蒲生町、満辺町、横川町、 栗野町、吉松町、牧園町、隼人町、福山町	市町村推薦
第8回	タイ (アタ、ルカオ)	平成11年 (金)～8/5(木) (6泊7日)	14名 (9)	鹿児島市、指宿市、加世田市、喜入町、 笠沙町、知覧町	市町村推薦
第9回	タイ (チェンマイ、メーハム)	平成12年 (日)～7/31(月) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市、鹿屋市、国分市、垂水市、 祁答院町、財部町、末吉町、串良町	市町村推薦
第10回	ベトナム (ホーチン、フーイ)	平成13年 (金)～7/26(木) (6泊7日)	19名 (13)	鹿児島市、出水市、加世田市、国分市、垂水市、 祁答院町、満辺町	市町村推薦
第11回	ベトナム (ホーチン、タピス)	平成14年 (金)～8/10(木) (6泊7日)	17名 (11)	鹿児島市、串木野市、枕崎市、国分市、垂水市、 満辺町	市町村推薦
第12回	タイ (ナラティワット県を予定していた)	平成15年度 SARS及び鳥インフルエンザの影響により中止			市町村推薦
第13回	マレーシア (クアラルンプール、マラッカ、ホムガ州)	平成16年 (月)～7/26(月) (7泊8日)	13名 (9)	鹿児島市、枕崎市、国分市、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第14回	ベトナム (ハノイ、ホーチン省、ハイナム村)	平成17年 (日)～7/31(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市、枕崎市、串木野市、国分市、知覧町、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第15回	マレーシア (クアラルンプール、マラッカ、ホムガ州)	平成18年 (土)～7/29(土) (7泊8日)	18名 (12)	鹿児島市、枕崎市、霧島市、知覧町、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第16回	ベトナム (ハノイ、バクサン省、バクン省)	平成19年 (日)～7/29(日) (7泊8日)	23名 (17)	鹿児島市、枕崎市、霧島市、 いちき串木野市、南さつま市、知覧町、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第17回	ラオス (ビエンチャン県、ソム村)	平成20年 (日)～7/27(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、 南さつま市、南九州市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第18回	ラオス (ビエンチャン県、ソム村)	平成21年 (日)～7/26(日) (7泊8日)	18名 (14)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、いちき串木野市、 南さつま市、南九州市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第19回	インドネシア (南スラウェシ州、パルサ村)	平成22年 (日)～8/8(日) (7泊8日)	19名 (13)	鹿児島市、鹿屋市、霧島市、南九州市、 南さつま市、枕崎市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第20回	マレーシア (クアラルンプール、マラッカ)	平成23年 (日)～7/31(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、 いちき串木野市、南さつま市、南九州市、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第21回	ベトナム (ホーチン市、ティンガ省、グイノイ村)	平成24年 (日)～7/29(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市、鹿屋市、霧島市、南九州市、 南さつま市、枕崎市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第22回	ベトナム (ダナン市、ホアン市)	平成25年 (日)～7/28(日) (7泊8日)	23名 (17)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、 いちき串木野市、南さつま市、南九州市、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第23回	カンボジア (プノンペン、バクサン)	平成26年 (日)～7/27(日) (7泊8日)	23名 (16)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、 南さつま市、南九州市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第24回	カンボジア (プノンペン、カンダール)	平成27年 (日)～7/26(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、 いちき串木野市、南さつま市、南九州市、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第25回	ラオス (ビエンチャン県、ビエンチャン市)	平成28年 (日)～7/31(日) (7泊8日)	20名 (14)	鹿児島市、鹿屋市、霧島市、南さつま市、 南九州市、枕崎市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第26回	ラオス (ビエンチャン県、ビエンチャン市)	平成29年 (日)～7/30(日) (7泊8日)	22名 (16)	鹿児島市、鹿屋市、霧島市、いちき串木野市、 南九州市、南さつま市、枕崎市、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第27回	スリランカ (西部州、ガンパハ県)	平成30年 (水)～8/1(水) (7泊8日)	21名 (15)	鹿児島市、鹿屋市、枕崎市、霧島市、 南九州市、南さつま市、実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第28回	カンボジア (プノンペン、シェムリアップ)	令和元年 (日)～7/28(日) (7泊8日)	21名 (15)	鹿児島市、鹿屋市、霧島市、いちき串木野市、 南九州市、南さつま市、枕崎市、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
第29回	ラオス	令和2年(2020) コロナにより中止	0名 (0)		
第30回	マレーシア (クアラルンプール、マラッカ)	令和5年(2023) 7/23(日)～7/30(日) (7泊8日)	21名 (15)	鹿児島市、鹿屋市、霧島市、いちき串木野市、 南九州市、南さつま市、枕崎市、 実行委員会枠	市町村推薦 実行委員会推薦
	計7カ国	計(376)平均13人			

